

二 七世紀日本の国家形成と東アジア

「鞠智城造営の背景」

鈴木 靖民

御紹介いただきました鈴木靖民です。よろしくお願ひします。私の報告では、鞠智城が大野、基肄の二城と同じく天智四年、六六五年に築城が始まったという通説を踏まえまして、その創建期の国家形成と東アジアの動きを述べてみたいと思います。キーワードは二つ。一つは「東アジア」、それからもう一つは「国家形成」でございます。

一 唐帝国のエクスパンション

七世紀初めから半ば、東アジアを含む東ユーラシアの国際情勢は緊迫状態にありました（図一二）。隋に代わって、唐ができましたが、唐の帝国は力を奮い、西は東突厥、今的新疆ウイグル、

吐蕃、今のチベット、南はベトナムを支配し、東も当時高句麗、百濟、新羅のあつた朝鮮半島への侵略を企てました。六五五年、百濟が高句麗、靺鞨と共に、新羅を攻めたことによつて、唐は、新羅の王の要請に応えて、高句麗攻撃を始め、六五八、六五九年と遠征しました。六六〇年、百濟を、高句麗よりも弱く見えた百濟を先に撃つ戦略に



写真 18 鈴木靖民氏

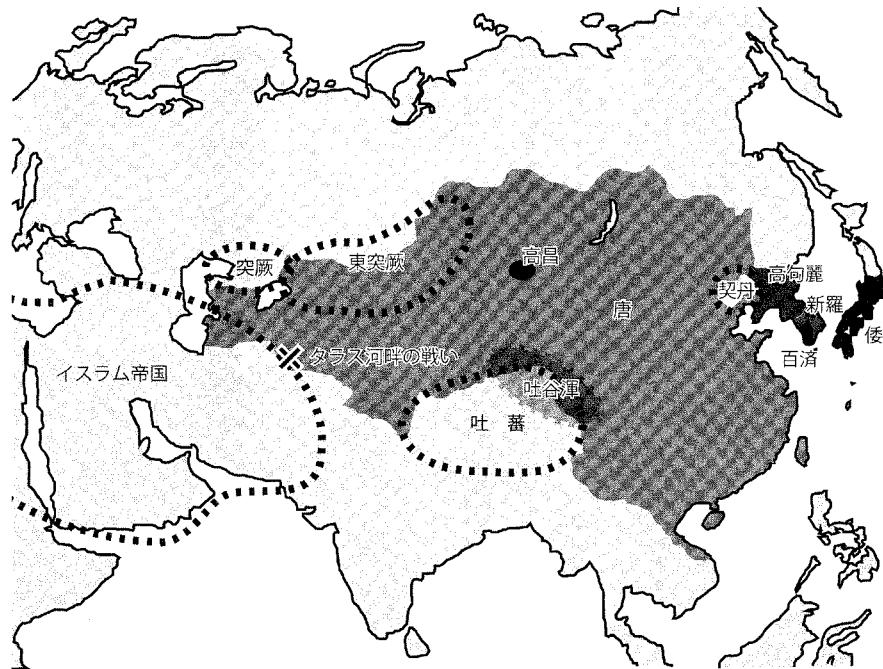


図 12 7~8世紀の東ユーラシア

転じて、唐の大軍が新羅軍と合流し、白村江を遡って、百濟の都の泗沘、現在の扶余を襲い、義慈王を追つて、旧都の熊津、現在の公州を陥れました。

百濟の遺民たちは周留城に拠り、日本、当時の倭国に復興のための救援軍と倭国に滯在する王子の送還とを求めました。倭国は、王権の中枢、つまり政府を北部九州に移して臨戦態勢を布き、初めは瀬戸内・北部九州の豪族軍により、次には全国的な徵發によつて、二度出兵し、六六三年、白村江口での唐・新羅軍との対戦の末、大敗北を喫したことは御存知のとおりであります。肥後の豪族が配下を率いて出兵したことは、『日本書紀』の持統天皇十年の条の、久しく唐の地に苦しんだという、肥後国皮石郡の人の壬生諸石の例に知られます。

六一八年、統一帝国を形成した唐は、皇帝権力の確立・拡大のために、その周辺と辺縁の諸国に武力を伴う冊封政策、羈靡政策を取り、膨張と征服により六四〇年から六五〇年頃に全盛期を迎えました。諸国に唐の制度・文化、力が波及し、そのリアクションは、東アジアの諸国における権力集中をめぐる争乱、変革となつて現れました。

六四二年、高句麗の泉蓋蘇文の政変が起り、六四三年からは百濟の義慈王の独裁的な政治が断行される。これはいわば逆クーデターです。六四七年、新羅の毗曇の乱、つまり毗曇の政変があり、その後の唐風化の政策が行われます。西の方では、六三〇年、東突厥、六三五年、吐谷渾、六四〇年、高昌、現在のトルファンが唐の属国と化しました。六四一年、高句麗に唐の使いがやつてきて、高昌国を征服したことを伝えて、脅迫しました。これに対して、東の百濟は反発して高句麗に付き、新羅を攻め、その朝貢を阻止しました。新羅は唐に接近しました。

倭国でもこの情勢と係わって、朝鮮諸国との外交路線、すなわち百濟に付くか、新羅を含む全方位かの争いが、政策実現を託すことと密接な皇位継承と絡んで、政治変動を起こしました。ご存じの通り六四五五年、蘇我氏が倒された、乙巳の政変であります。以後、王権による国家確立を目指す列島支配の長期の変革が、六七二年の壬申の乱を挟んで続きます。倭国各地の山城造営もこの一環に位置付けられるだろうと考えます。

二 百濟との関係、百濟人の国政参画

七～八世紀の東アジアの環境をみると、倭国の中文化は、隋・唐及びそれ以前の南北朝の文化の他、朝鮮の百濟・高句麗・新羅の文化を順次選択的に取り入れ、融合しながら形成されたと考えられます。倭国は、百濟との間に最も緊密な関係を持ちました。百濟は、高句麗・新羅と対抗する中で、倭国との軍事協力を得るために、最先端の、仏教などの文化を伝えました。最近もそのことを示す、扶余の王興寺で出土した舍利容器（写真19）、瓦などと、飛鳥寺との類似性が窺われますように、推古朝の天皇・

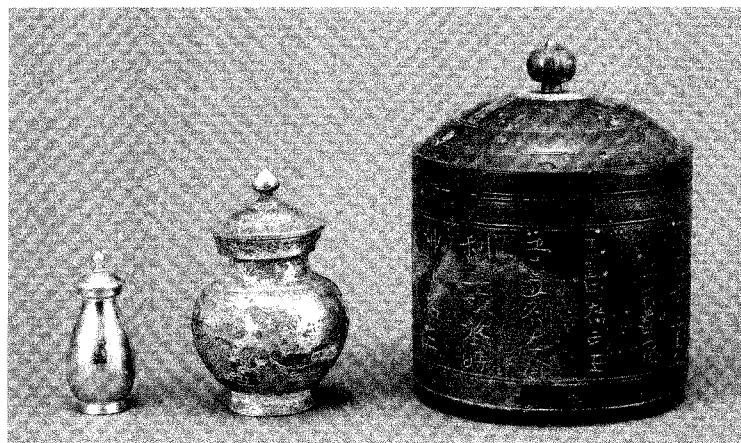


写真19 王興寺出土の舍利容器
(国立扶余博物館 2011より転載)

皇族、蘇我氏などは支配層の秩序化のイデオロギー、いわば王権の仏教として利用したわけです。と同時に、惠慈に代表される高句麗僧、それから高句麗系の寺院、それから新羅の僧、新羅系の寺院も当時の飛鳥仏教に影響を及ぼしました。

次いで、七世紀の後半には、新羅との関係が重要になります。倭国は、朝鮮諸国の護国思想に倣い、かつ仏塔建立を競つて、天武朝以後国家仏教化を本格的に目指し、特に華厳經に基づく新羅仏教の摂取が、新羅人の僧尼や俗人の渡来、留学者による習得を通じて、文字文化・文字技術の導入と共に進みました。それから、百濟は、西谷先生の示された地図（図一〇）に載つておりましたが、扶余の双北里の倉庫跡附近で出土した「那尔波連公」という木簡は倭からの贈り物の付け札でしようが、さらに、六一八年の百濟で、八世紀以降、律令制下で日本独自とされておりました公の出拳制、稻を貸して秋に利息と共に取る強制貸付ですが、その源流を示すような「貸食記」木簡が出土しているのであります。これは、元を辿つて

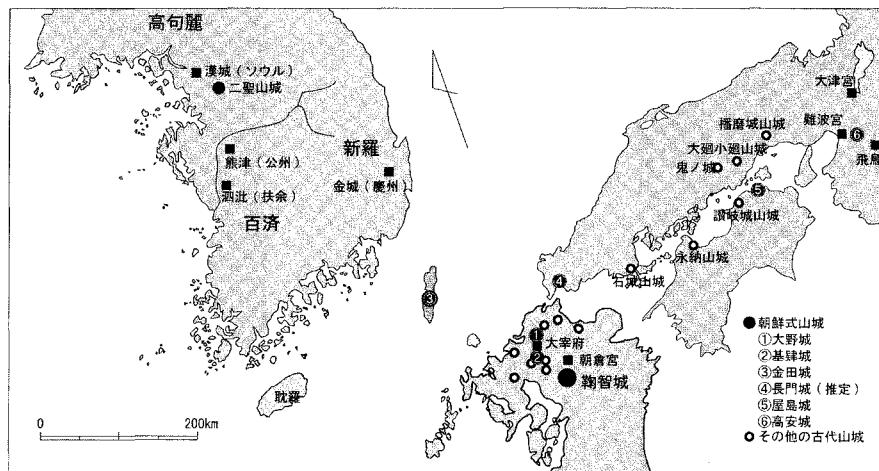


図 13 古代山城の分布と古代の朝鮮半島

いきますと、三世紀、レッドクリフで知られる三世紀の呉の「貸米」簡牘があり、さらに漢代に遡るものであります。これを倭国が受け入れたことができたのは、おそらく七世紀後半の亡命百済人の関与によつております。百済の貸食制が他の諸制度と共に、実施されたのであらうと思想います。

『日本書紀』によ

りますと、六六〇

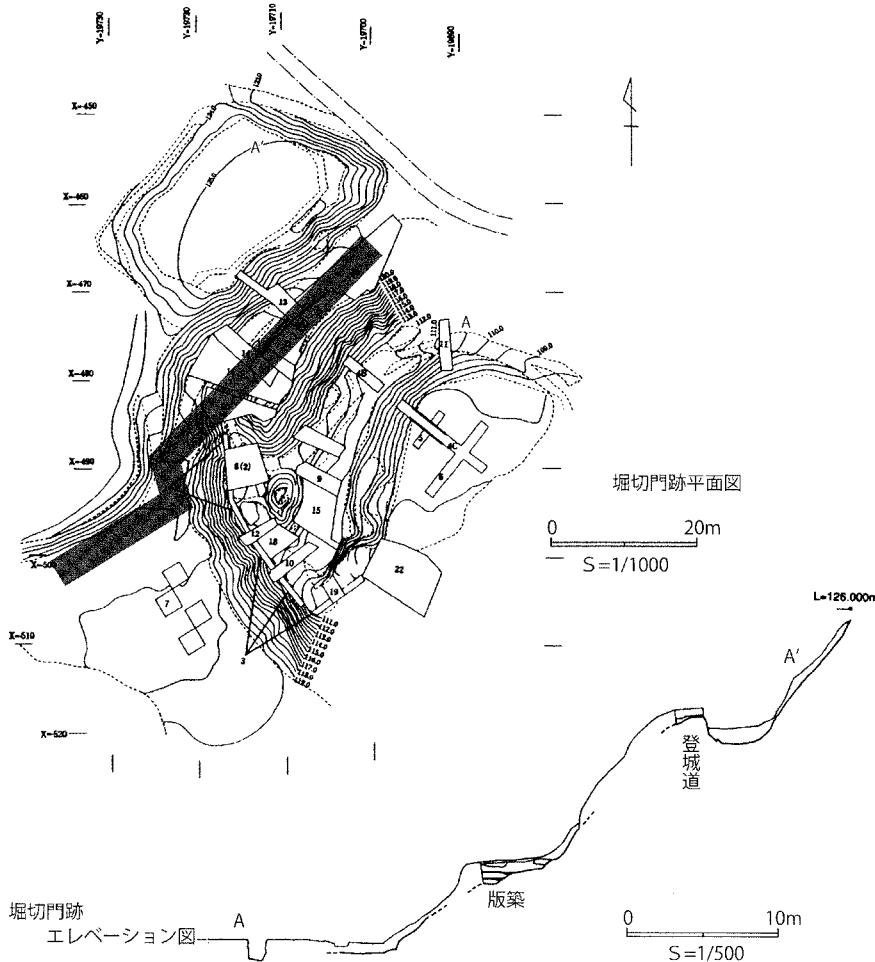


図 14 堀切門のクランク道

年以後の百濟の滅亡、白村江の戦いに際して、実務に長け、技術技能を帶びた百濟人のエリート、テクノクラートが亡命し、倭国の王権に参加しました。このことと百濟モデルの制度や政策とは関係が深いと思います。六六三年に、百濟の重臣、將軍たちが移住してきたのに対し、六六五年に王権は百濟と倭国の官位の比較を行つております。そして、彼らに官位を授けて、六六三年に、今日すでに何回もお話しが出ております、築城の指導をさせ、そのために各地に派遣しております。つまり、天智天皇の王権は、軍事技術を持つ百濟官人をすぐに倭国で活用した、ということがいえます。

山城には高句麗的な山城がある、無いという議論があります。それについては百濟人が高句麗からの技術移転、技術移動によつて築城している、という蓋然性があると思います。最近の研究で、『日本書紀』の編纂に六世紀以来の渡来した百濟人が関与して、記述に大きな影響を有したことが強調されております。この点を考慮すると、亡命した百濟人の意思も反映しているとすべきかもしれません。白村江の戦いの後に、防人を置いたり、烽火を設けたり、水城を築いたり、山城を置くという記事は、政府の記録によつているにしろ、文献には見られない瀬戸内から大和に分布する多くの山城にも百濟人との関係が極めて深いのではないかと思われます。鞠智城は、外郭を土塁と石垣で囲つており、城門を、矢野さんに確認しなければいけないですが、私が先月拝見しましたところ、さきほどスライドもありましたように、深迫門や堀切門は、クランク構造になつてゐるのではないでしょうか（図一四）。このような防御性を高める構造の例は朝鮮半島にあるわけです。それから、兵舎や大宰府系の瓦を使つた多数の倉庫群を置いて存続した、ということを重視するとすれば、やはりこれは朝鮮式山城の一種であり、軍事的機能を基本とする山城である、といつていいのだと思いま

す。八角形の建物については、西谷先生が朝鮮での例を示されました。その他に貯水池で出土して、去年話題になつたと思いますが、百濟系の菩薩立像（写真一二）は、造営に係わつた百濟人の信仰に、つまり仏教信仰に所縁のあるものではなかつたか、と思われます。

三 東ユーラシアへのひろがり

次に、七世紀の東ユーラシアの動きを考えると、唐の東西諸国が空間としてかけ離れていても連鎖する歴史事実が認められます。唐の高句麗遠征は、百濟滅亡後も続きます。六六八年、唐は、高句麗の泉蓋蘇文の死後の内紛や、百濟・新羅が対立する状態に乗じて、高句麗を滅ぼすのですが、ところが勝利した將軍の薛仁貴が直ちに踵を反して退却し、今度は西北の吐蕃と戦い、二年後には唐の属国の中谷渾が吐蕃のために滅ぼされてしまうという事実があります。かつて、陳寅恪という有名な中国の歴史家がこれを「外族盛衰の連鎖性」とする説を述べられましたが、最近も北京大学の王小甫先生は、これを「東西の形勢、遙かであるが相呼応し、彼此起伏してあたかも符合する」と述べておられます。最近、六七〇年からの唐と吐蕃の三次にわたる戦争と、唐の敗北を契機にして、新羅が唐を驅逐して朝鮮半島を統一し、突厥の復興、契丹の反乱、渤海の建国という動きが、緊密な交流を維持しながら存在し、日本にも文化、制度を取り入れていた唐・新羅・高句麗から直接のインパクトとして及んだと、そういう見通しを立てる若手研究者の説があります。

七世紀の日本、当時の倭国の社会の細部を列島の中のみでなく、また唐や朝鮮などの東アジアと

の関係や交流だけへの注目に止まらず、東ユーラシアの広がりの中で理解すべき可能性が示唆されています。これについては、八世紀の半ばの藤原仲麻呂政権の時的新羅征討計画は、唐の安史の乱と関係する、それはさらに、アジアの西の果ての西トリキスタンのタラス河畔の戦いがあり、ここでソグディアナの諸国とイスラムの連合軍とに高句麗人の将軍の高仙芝率いる唐軍が戦つて敗れたことと関係があるのでないかという仮説もあります。

それから、九世紀前半の新羅の張保高の勢力による、東シナ海をまたにかけ、国境を越えた交易活動があります。張保高の活動も新羅の王権や大宰府、王臣家の政治的経済的な利害と相俟つて、繰り広げられたもので、日本の遣唐使なども彼の協力を得、その世話を受けるのです。これらの国際的な連鎖性は、基本的には唐を中心において、唐に近接する東西の諸国が、弧状を描きながらいすれも周辺にあり、倭国がさらにその辺縁にある、という諸関係の国際構図が存在するためであつて、それを巨視的みると、東ユーラシアの長期波動とも係わっている。その中に日本の山城も、そして鞠智城もあると考えてよいのではないかと思ひます。

四 古代山城を取り巻く諸問題

終わりに、古代の山城の特色、それから唐・新羅の動きを簡単に触れてみます。

西日本各地の朝鮮式山城の問題は、色々課題として残つておりますが、七世紀末、八世紀以後においても山城の維持運営、性格変化は、古代国家の展開に伴い、地方支配の拠点の占定と絡み、列

島内外の東北の蝦夷とか、南の、八世紀初め頃までの隼人の服属が、これらの対外関係との関連性のもとに進むのであろうと思います。

鞠智城についても、同じような観点で、立地・構造・形態の特異性、地域性あるいは、一方で普遍性が、王権あるいは国家の軍事と密接なつながりにあることを浮き彫りにしていく必要があります。鞠智城は、筑紫の大野・基肄、二城に離れて肥後に独自に存在しますが、基本的には国家レベルで企画・造営され、継続した山城の一つに他ならない、と思います。

そして、先ほど西谷先生に予告していただいたので触れますと、日本史全体の動きを考えると、最近の研究では、明日香村の相原嘉之さんなどによつて、倭国の王宮の所在する明日香の周辺に山城、羅城、烽火、運河、寺院などが廻らされており、そして宮城防衛システム構想があると論じられております。このことが認められるとすれば、山城などは倭国の支配層の政治・防衛思想・政策の実現と不可分の関係にあると考えます。このことは、先ほどの西谷先生のお考えと関係するのですが、百濟・新羅の王都を幾重にもネット状にさまざまに防衛する体制があるわけとして、これに比べておそらく一世紀以上、百濟の熊津、つまり公州を考えますと、一四〇年くらい遅れて採用したことになるであろうと思います。

それから最後の最後に、これらの背景をなす唐・新羅の侵攻という、いわば脅威論について言及しておきたいのです。

私は、唐・新羅、二国一緒にではなくて、それぞれの側の事情を改めて捉えなおしてみなければならぬと思います。『日本書紀』持統四年条に唐が倭国を攻めるという情報はあつたらしい

唐で抑留された人の記事があります。山城は初め、唐を意識して造られたに違いないと思われます。しかし、白村江の戦いの後、倭国に対し唐と新羅が連合することはありません。その例は、つまり六六九年以後、三〇年間唐との関係は、遣唐使を含めて、唐との公的関係は中斷し、新羅はライバルでもあるのですが、新羅とのみ頻繁な相互の交流が繰り返されるという、厳然たる事実があります。そしてこの間に、律令制の古代日本国、日本の古代国家が成立するのです。この事実を考慮しなければいけないと思います。

山城の造営は、新羅の攻撃に備えるものとはいえないのではないか、と考えますと、先ほどの、笛山先生を始めとする先生方の示唆深いお話から、鞠智城は有明海からの進入にも備えるとの見解が示されます。もちろん大宰府の後方基地、後方の拠点としても機能し、かつ有明海に向かっているのは何故かということの鍵になるのかもしれません。

いずれにしましても、白村江の戦い前後の東アジア、さらに東ユーラシアの国際変動があり、そのインパクトを契機として、倭国もまた各地での徵兵や、武器集中を始めとする軍事制度の整備を通して、他の戸籍の編成、国、郡、五十戸つまり里制の施行などと相俟つて、集権的な国家の確立を鮮明に指向し、現実に即した実践に移り始めたと捉えられるのでして、西日本各地の山城群もうした地方支配体制を前提にして造営が可能になつたとするのが妥当であります。つまり国家の形成、国家の展開と対応するかたちで、各地の山城を歴史的に理解すべきであるし、古代の鞠智城もその特色ある一つであると、こう考えるわけです。

御清聴ありがとうございました。